

# 自分のサゴは自分で食べてはいけない

—パプアニューギニア、セビック地域のサゴヤシの利用について—

豊田由貴夫

亜細亜大学国際関係学部 〒180 東京都武蔵野市境 5-24-10

## Your Own Sago You May Not Eat: Sago Utilization in the Sepik Area, Papua New Guinea

Yukio Toyoda

キーワード パプアニューギニア、セビック地域、文化人類学、民俗概念、交換

パプアニューギニアのセビック地域は、低湿地が多いこともあって、サゴヤシが広く食料として利用されている。このセビック地域で文化人類学の立場からしばらく調査を続けてきたが、この地域でのサゴヤシの利用について簡単に紹介しながら、感じている問題点をいくつか指摘したい。

パプアニューギニアは現在、人口約 400 万人といわれているが、低湿地を中心とする一部の地域でサゴヤシが主食として利用されている。サゴを主食とする人々の数は正確な数字は出ていないが、少し古い文献では 10 万人以上という数字がある (Lea 1972)。ただしこれは控えめな数字で、おそらくは 20 万人以上いるのではないと思われる。セビック川やフライ川など大きな川の流域や、低地のデルタ地域、例えばブラリデルタなどの地域で、サゴヤシが生育しており、サゴが主たる食料とされている。また、主食としてではなく、非常用の食料として利用する地域もある。例えば、ヤムイモを主食とする地域では得られる食料の量が季節的に変化するので、畑から取れるものが少ないとき、それを補うものとしてサゴヤシが利用される。また、海岸地域でもタロイモが取れないとき、あるいは収穫量が少ないときの予備の食料として利用されているようである。

サゴヤシの「畑」を作っている、と表現されている地域もあり、野生のサゴヤシ林でデンプンを得易い木を倒して食料とする地域もあると言われているが、この区別は微妙なものようである。というのはサゴヤシの「畑」と表現される場合でも、実際には野生のサゴ林の一區画を決めて、その區画の手入れを行って「畑」としており、野生のサゴ林を利用している場合でも、同様なことは行っている場合が多いからである。したがって、厳密にこの区別を行うことは難しいようである。

サゴからデンプンを取り出す作業は、通常、以下のようになり、作業の段階によって男女の作業の区別がなされている場合が多い。まず幹を倒し、この切り倒した幹をデンプンを取り出すための場所(いわゆる洗い場)に移動する。小川などの水流が利用できる場所にデンプン抽出のための道具が揃えてあり、その場所までこの幹を移動する。あるいは川にサゴの幹を浮かせて自分の村の近くまでカヌーで引っ張って行くというのもよく行われる。ここまでの作業は男性が行うのが普通である。この後の作業は大部分、女性の手にもわたる。皮質が取り除かれてから、特殊な器具(いわゆるサゴ・ハンマー)で中の髓を砕き、細かくする。細かくされた髓はサゴヤシの葉柄を利用したといに入れられ、水を加えられ、ココナツの繊維で作られたネットで漉されてデンプンのみが水とともに流れる。この水とデンプンはといの下の容器(よく、使い古した小さいカヌーが使用される)に貯められ、沈澱させることによってデンプンが得られる(図 1)。



図 1 叩かれた髓からデンプンを流し出す。

料理の方法としては、焼く、あるいは熱湯で溶かしてゼリー状にして食べる、そして竹筒の中に入れて焼くなどの方法がある。ゼリー状にして食べる場合は魚や緑色植物と一緒に食べる。

セビック地域でのサゴ利用に関して、私が感じている問題点の一つは、現地住民の伝統的な行動パターンの説明に関する問題である。住民の伝統的な行動パターンの中には、結果としてサゴヤシの生育に良い環境をもたらしているようなものも存在しているが、これを住民はどの程度意識しているのだろうか、という問題である。

例えば、デンプンを獲得する以外のいろいろな目的でサゴヤシの幹を切り倒すという事がよく行われる。これは結果としてサゴヤシの幹の密度を減らし、サゴヤシの生育のための理想的な条件に近づける、という効果がある。サゴの幹を切り倒す理由としては、一つには甲虫類(いわゆる「サゴ虫」)の幼虫を得るため、というのがあり、木を切り倒しておくことで甲虫の幼虫がサゴの髓の部分で繁殖しやすくなり、幼虫がとれる。これは食料として集められ、貴重なタンパク源の一つとなる。また、建築材料のためにサゴヤシを切り倒す、ということも行われる。セビック地域では屋根の材料として大体サゴヤシの葉が使われる。このようにサゴヤシをそのデンプンをとるという目的以外に、様々な目的でサゴの幹を切り倒す、ということが行われる。そしてこれがサゴの幹の密度を減らす効果があり、結果としてサゴの生育のために理想に近い環境が得られる、という議論がある。

しかし、このような現地住民の行動パターンを、上のような、いわば我々の側から見た論理で説明してしまっただけなのか、という疑問が出現する。以上のような色々な目的でサゴを切り倒すという行為が結果としてサゴヤシの生育に良い環境を作り出している、ということは確かに言えるのだが、だからといって現地の住民がこれを意識してやっているかは疑問である。人によっては、結果を見て、だからこのような習慣はサゴヤシの生育のために存在しているのだ、と主張する場合がある。しかし、住民にこのような習慣にそのような意味があるのかと聞くと、別にそんなことには関係ない、という答が返ってくる。サゴヤシを倒しておくのはサゴ虫の幼虫が繁殖するようにという目的はあるが、それ以外の目的はない、というわけである。また、屋根を作るためにサゴヤシを切り倒すが、その際も、別にサゴヤシの生育を考えたことではない、ということになる。

このように、我々が期待するような論理を現地の住民が意識していない、という場合はこのようなサゴヤシの例ばかりでなく、一般的に数多く存在する。また、この

ような問題は何もバブアニューギニアだけでなく、もちろん他の地域でも有り得ることである。そして私が問題として感じるのは、このような場合、結果的に外側から見て効率のよい方法となっていて我々の論理で説明できそうな場合でも、現地の住民がそれを意識してやっているのかは疑問である場合が多い、ということである。そしてその際に我々の論理で現地住民の行動を説明してしまうことが多いのだが、はたしてそれでよいのだろうか、ということである。

もちろんこれに関しては、外側からの論理が妥当である可能性もある。例えば、現地の論理でも最終的な目的は存在していたのだけれども、その目的が伝えられなくて行動だけが残り、その論理が残っていない、というような場合である。もともとそのような目的があつて行動していたのだが、その目的が忘れられてしまった、という考え方である。バブアニューギニアでは、なぜそのような習慣を行っているのか、という質問を現地住民に行った場合、単に「祖先がしていたから」というのはよく返ってくる答である(Camp 1979)。また、バブアニューギニアでは他の地域の習慣を模倣する、ということがよく行われるが、この場合でも行為だけが伝播してその背景にある論理が伝わらなかった、という説明は有り得る。

しかし、これらはあくまでも可能性であり、現地の論理が容易に見いだせるわけではない。だからといって、現地の行動を何も説明できない、というのではなく、ここで主張したいのは、安易に我々の論理で現地の行動を見てしまうことの危険性を考えなければならない、ということである。現地の論理は我々の考えるものと同じかもしれないし、異なるかもしれない。その際、現地の論理がどのようなものなのかは、現地でのデータをもとに考えていく必要があり、またそうせざるを得ないのではないか、ということである。

もう一つ、セビック地域のサゴヤシ利用で興味を感じた点は、一部地域で、「自分で植えたサゴは自分で食べてはいけない」という習慣があることである。これはセビック地域の海岸部の地域を訪問した際に得られた情報である。ある人が植えたサゴは、その人が切ったり、料理したりすることは禁じられており、他の人(通常は同じ氏族の他の者のようである)が切って、洗い、作ることになっている、というものである。他の人が料理して、それを植えた人にあげることもいけない。さらには、サゴヤシの葉で屋根を作る場合も、自分で植えたサゴヤシを使ってはいけない、と言われていた。

実は、ニューギニア地域では一般的に「自分のブタは自分で食べてはいけない」という規則がある。ブタはバ

バニューギニア、特に高地地域では財産の象徴であり、一般的には何頭のブタを持っているかが、その個人の財産の指標となる。そして儀礼や祭り際にはブタが贈与される場合が多いが、この際も何頭のブタを相手に贈ったかというのが非常に重要視され、これを明確に示すために広場でブタが並べられて派手に展示されたりする。そしてそのような儀礼の際にはブタを殺して食べることになるが、その際にブタを提供した本人はそのブタを食べてはいけないという規則が一般的に働く。つまり、自分で育てたブタは他の人、他の集団に贈るためのものであって、自分たちが食べる物ではないのである。自分たちが食べるのは、別の祭りの機会に他人からもらったブタである。

同様なことはヤムイモについても言われる。「自分のブタは自分で食べてはいけない。自分のヤムイモは自分で食べてはいけない」というのは、セビック地域のアラベシュ族の格言であり、著名なアメリカの人類学者、マーガレット・ミードが報告したものである (Mead 1935)。この格言は「自分の母親、自分の姉妹は食べてはいけない(つまり、結婚してはいけない、あるいは性的関係を持つてはいけない)」という語句と一緒に述べられており、これはフランスの構造人類学者、レヴィ・ストロースが「結婚は女性の交換である」という自説を示している例として引用して、有名になった言葉である (C・レヴィ=ストロース 1977)。

ニューギニア地域、あるいはメラネシア地域では、一般的にブタやヤムイモ(すべての種類のヤムイモではなく、特定の種類のヤムイモのようである)は財として扱われ、したがって自分たちで消費するのではなく、他の人たちに贈与することになる。そして自分たちは他の人たちが育てたブタやヤムイモを食べる。これは一般的には、財を交換することにより、集団と集団との結びつきを強める、という意味があるとされている。

ニューギニアあるいはメラネシアで、一般的にこのような財としての性格を持つ作物はヤムイモであり、もう

一つの典型的な作物であるタロイモはこのような性格を持っていない。これは季節性が強く、そのために収穫儀礼が行われることが多いというヤムイモの性質と関係すると考えられるが、しかしサゴヤシの場合はほとんど季節性がないにも関わらず、このような習慣(自分のサゴは自分で食べてはいけない)が存在するのは興味深い。短時間の聞き込みであり、それも他の脈絡での聞き込みで得た情報なので、詳しく論じられないのが残念であるが、他の作物との関係、またサゴヤシの民俗的な意味について調べてみたい、と感じた次第である(この文は1993年5月に東京大学で行われた講演会での原稿をもとに加筆訂正したものである)。

#### 注

- 1) 他の文献によれば、バニューギニアの全人口の10%以下という数字が出ている (Townsend 1982)。

#### 引用文献

- Camp, C. 1979 A Female Initiation Rite in the Neigrie Area. In: Powers, Plumes and Piglets: Phenomena of Melanesian Religion. (HABEL, N.C. ed.) Australian Association for the Study of Religions (Bedford Park) 68-83.
- Lea, D. A. M. 1972 Indigenous Agriculture. In: Encyclopaedia of Papua New Guinea. (RYAN, P. ed.) Melbourne University Press. (Carlton) 10-18.
- Mead, M. 1935 (1963) Sex and Temperament in Three Primitive Societies. Morrow Quill Paperbacks (New York).
- Townsend, P. K. 1982 A review of recent and needed sago research. In: IASER Discussion Paper No. 44, Sago Research in Papua New Guinea. (Port Moresby) 1-38.
- レヴィ=ストロース, C. 1977 親族の基本構造(上). 番町書房(東京).